

北海道における15歳未満発症小児1型糖尿病児の長期予後調査 -1959年から1996年発症児521例の解析-

松浦 信夫

市立美唄病院 小児科 / 前北里大学 小児科

【目的】

我々は、北海道において、1959年から1996年までの間、15歳未満で発症した1型糖尿病児の登録を行ってきた（北海道コホート）。その症例521例について、2020年3月から2022年2月にわたり、その長期予後を調査した。今回、その概要について報告する。

【方法】

調査は、市立美唄病院倫理委員会承認の後、北海道内3大学病院、全道の総合病院・診療所倫理委員会承認の後に実施された。発症時登録票をもとに、患者の追跡を行い、最終的に現在の主治医に、患者の生死、合併症の有無などを記載して頂いた。総症例数521例の内、391例（75%）の追跡が出来た。この内、66例の死亡、66例の血液透析導入が確認された。死因はDahlquist Gらの方法により、死亡に糖尿病がどの位関与したかにより、死因1から4に分類して解析した。死因1は糖尿病が非常に関与した、死因2はある程度関与した、死因3は関与していない、死因4は不明である。血液透析導入または腎移植については、発症年を1956-79年（1970年群）、1080-89年（1980年群）、1990-96年（1990年群）に分けて評価した。病型型（急性発症、緩徐発症）、発症が思春期発来前か後かをK-M法で解析した。

【結果】

1. 死因の分析と死亡率の変化。K-M法で検討した結果、死因1は年代と共に低下した。死因1+2では、1970年代死亡と1980年代死亡に重なりが見られた。この重なりは、死因2の突然死の増加によるもので、男性患者に多く見られた。2. 透析導入または腎移植。罹病期間、導入時の年齢は、各年代で変わりは無かった。しかし、血液透析又は腎移植となった症例数は、年代と共に、著明に減少していた。

【考案】

糖尿病児の長期予後を見ると、死亡率が用いられる。スウェーデンでは、糖尿病が強く関与する死亡以外の死亡率は、健常児と変わらないと報告されている。今回の検討で、死亡率は、明らかに低下していた。但し、80年代になって、男性が一般社会に進出し、単身生活を行うことにより、突然死が増加していた。思春期初来以降に発症した症例、緩徐進行型は思春期初来以前発症、急性発症型に比し、透析導入又は腎移植率が高いことが明らかになった。

【結論】

長期予後評価の死因は、死亡に糖尿病がどの位寄与しているかの評価が必要である。予後改善のためには、慢性腎症発症の防止が必要である。